源氏物語 地名と方法

南波 浩 編
廣川勝美編集

桜楓社

源氏物語 地名と方法

南波　浩　編
廣川勝美編集

桜楓社

編者
南波　浩（なんば　ひろし）
1910年、京都府に生まれる。
1935年、京都大学文学部卒業。
現在、同志社大学名誉教授。日本古代文学、主に平安朝文学。

主著書
『校異 古本 竹取物語』ミネルヴァ書房、1953年
『物語文学概説』ミネルヴァ書房、1954年
『物語文学』三一書房、1957年
日本古典全書『竹取物語・伊勢物語』朝日新聞社、1960年
日本古典全書『大和物語』朝日新聞社、1961年
『紫式部集の研究　校異篇・伝本研究篇』笠間書院、1972年
岩波文庫『紫式部集』岩波書店、1973年
陽明叢書『伊勢物語・大和物語』思文閣、1976年
陽明叢書『源氏物語　四』思文閣、1979年
『紫式部集全評釈』笠間書院、1983年
編著書
『王朝物語とその周辺』笠間書院、1982年
現住所　〒606 京都市左京区吉田神楽岡町8

伝承と様式Ⅱ
源氏物語 地名と方法
定価はカバーに表示してあります。

1990年10月5日　初版　印　　刷
1990年10月10日　初版　第1刷発行

編　　者　南波　浩
編集担当　廣川勝美
発 行 者　坂倉良一
印 刷 所　朝日精版印刷㈱

発 行 所　株式会社　桜　楓　社
東京都千代田区猿楽町1－3－1
(郵便番号)101(振替)東京6－18020
(電話番号)　03－295－8771(営業)
03－295－8774(編集)

Printed in Japan
(著者検印は省略いたしました)
造本には十分注意しておりますが落丁,乱丁の場合はおとりかえいたします。
ISBN4－273－02403－9　C3092

まえがき

土から生まれたものは土に帰る。それが地の土から創られたひとの運命である。

ひとは眼にみえぬいずこから現われていずこかに去っていく。そのわずかな時の間を生と呼ぶならば、それは眼にみえる地上のどこかで営まれる。そこは広いか狭いかにかかわらず極めて限られた範囲である。

ひとの生きたことの言葉による痕跡が地名である。地名は地表に刻まれた点である。自らの視野にとらえられるところから、さらにその周囲に広がる遥かなる彼方へ。同心円的に輪を大きくしながら次第に視野から消えていく。そのように展望される地表の一点を切り出して名づける言葉が地名である。地名は、本来、いかなるレヴェルにおいても前もって存在しない。

地名は便宜的に付加された符号ではない。地名はただ所在を指し示すのではなく、一つの空間を切り出し分節する。そして、それを徴しづける。地名は、時として、空の彼方から天降(あも)りするものの徴しであり、時として、地の底から根生(ねば)うものの徴しである。地名は聖所の刻印であり、悪所の刻印でもある。神名が神話であるとするならば、地名は伝承であるといえる。むしろ、地名において伝承は成り立ち、伝承において地名は保証されるというべきである。地上における神々の巡幸における一つの言葉、一つの行為が地名の起源とされる。地名の語源的意味への関心はその延

長線上にある。今日の地名学の研究が地名の語源の探索に多くを費しているのも同様である。だが、地名の意味するところは必ずしも言葉の有する語義にとどまりはしない。地名に意味があるとすれば、言葉そのものがそうであるように、ひとの生とのかかわりにおいてである。ひとの生の場の徴しづけ、それが地名である。それはその地に営まれるひとの生そのものによって彩られている。

地名が人間と自然の関係の交点に位置するとしても、それは、現代のように、人間が自然を支配し秩序づけるためではない。その反対に、神々によって自然のうちに人間が存在せしめられる。そのことの言語装置が地名である。自然についての地形語から生成する地名の多くは、神々を命名の根拠とすることによって、この地における人間の生を保証する徴しづけの最初であった。地名は神々の賜物である。地名の細部に神々は宿る。地名は神々へのコスモロジカルな回路の記憶装置である。それが地上の空間の連続として展開されるのが地名の連鎖である。ここに隠された記号体系としての地名を認めることもできる。地名の記号的謎解きは地名そのものにとっても本質的な営みであるといえよう。神々による聖化の徴しづけとしての地名のもつ意味がここにある。

地表に刻まれる地名の密度は均一ではない。視野の中心から周囲に広がるにしたがってまばらになっていく。そして、その果てには地名のない世界がある。むしろ、名づけることのできない無限の世界にようやく刻みこまれたわずかばかりの印が地名である。最初の地名は、地理的な空間というよりかは、地図として記号化されることから零れ落ちる、坂や辻や原などの特殊な微地形としての場所についてのものである。それらの地名の一つひとつが異質なものとして濃密な意味を含んでいる。

このような自然としての地名の上に新たな秩序の枠組としての地名が与えられた。それが都市の地名である。それは格子状（グリッド）の枠組において配置される。街路がつくる格子状パターンは、網目の大小が格差を示すが、それぞれの内部においては均質を前提とする。そのような区画が中心からの遠近による上下関係において配置される。それらが数詞

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

として表現されたのが都市の地名である。都市は数詞地名によって構築されているともいえる。

都はアルカイックな都市である。都市の中心にはおびただしい地名がある。都市はその政治的・経済的中心であればあるほど、その地理的空間は細分化され濃密な機能が与えられる。地名の密度の高さが都市の中心の証拠でもある。だが、都の最も中心の聖域は地名の意識が稀薄である。むしろ、地名を与えられることを拒否する。それは都の最も中心が空洞であることと同義である。古代の都では条坊制によって大路・小路の格子状プランで方角地割された区画に地名が付けられる。地名は天皇の都の秩序に組込まれる側のものである。そのことにおいて古代の都はプレ・モダンの都市とも異なる相貌をみせる。

都のランド・マークは宮殿である。それを中心として官衙の殿舎が配置される。宮域である。それを囲むように邸宅などの建造物が配される。京域である。宮域の周辺に配置された大路は一条から九条に至る数詞を基本とする名を付けられる。そして大路の間に作られた小路と、大路によって区画された条坊が名をもつ。さらに東西南北の京極の名を外枠として大路を基準にして内に向って四至を限るところに禁域や名所、寺社の境域が設定される。さらに、それらに殿舎・邸宅の名前を加えたのを都の地名群とみることができよう。

そのような都の地名が大路を枠組として秩序づけられているとすれば、京師から畿内、畿外さらに諸国に及ぶ地名は都を起点として展開する官道に沿って配置される。国名や郡名や条里名である。それらは都を中心として展開されながら東西南北の方位において配置されている。それらは厳密な方向というよりかはおおよその世界認識である。それは東西南北の方位において外に向って四至を限るところに国占めの標しが求められたように、都を中心にする地理的な広がりである。だが、その認識は、地図をもたぬ時代においては地名の配置と連鎖にとどまる。それらは最も表層にみえる地名である。その深層に自然の地形を基盤として生成した地名が埋められている。

地名の有するイメージの喚起力というものがあるとすれば、それは天皇の都を中心とする版図に組込まれた新しい

地名の下に埋められている旧い地名のものである。言葉のレトリックにみえる表現の根底には地名のアルケオロジーが介在しているともいえる。歌枕という地名表象もまた、そのような自然としての地名を媒介にして重層するイメージによるというべきである。しかもそれらは現実的な場所としてよりも表現的な地名としてのみ求められるのである。

都は表層から深層に至る新旧の地名をもっている。制度としての地名の下に塗りつぶされた最初の自然としての地名が隠されている。数詞を地名とすることは、その領域に棲む存在をおし殺すことである。重層的な都の地名は都そのものの重層性を現わしている。

都は都という呼称そのものを地名として、その内部に無数の地名を抱えている。地名は都という円環する空間から切り出された一つの小宇宙である。そして、そのような地名の集積が都そのものである。そして新しい地名は下から滲みでる旧い地名によって浸蝕される。地名は徴しづけを帯びた鍵語として都そのものを深層から脅かしている。地名が伝承であるとはこのことをさしていう。都市は常に伝承を内包すると規定することは可能である。このことは反転させてみれば、伝承を有しているからこそ都市なのである。しかも、都市と伝承とは常に相互補完的に入れ子となりつつ表層から深層に至る都市のコスモロジーを形成しているのである。それは、まさに、都、そういってよければ、都市と表現としての地名とが織りなすのが伝承にほかならない。

都市の抱えたクレバスの奥深くに地の痕跡としてうごめくマグマの如きものがある。それが地の名を負う伝承である。そのような地名を鍵語とする伝承を内部に組込むことによって都の所産である物語が物語でありつづけうるともいえよう。地名は物語の舞台や環境、風土や歴史の問題であるにしても、より根源的には物語そのものの方法であるといわなくてはならない。

（廣川勝美）

目次

まえがき

＊

巻名としての地名「須磨・明石」の機能……南波　浩……9

＊

〝自然〟としての地名――『源氏物語』のばあい――……野村　精一……31

＊

歌枕としての地名――光源氏の詠歌をめぐりて――……藤井　貞和……45

＊

構造としての地名――『源氏物語』の回路――……深沢三千男……58

場所としての地名から象徴としての地名へ――「歌物語」の視座から――……高橋　文二……87

＊

喩としての地名――明石を中心に――……高橋　亨……102

花の景としての都――須磨・明石巻を中心に――……廣田　收……121

＊

制度としての地名――「とうゐむの大路を折れ給ふほど二条の院の前なれば」考――……増田　繁夫……148

注釈としての地名――『河海抄』の准拠論をめぐって――……谷口　孝介……168

＊

祓禊としての地名――「難波」・「堀江」・「田蓑島」、光源氏の再生場か――……石原　昭平……184

「大江殿」考――須磨巻の表現――……小島　繁一……205

＊

物語としての地名――六条わたりの物の怪――……廣川　勝美……219

あとがき

源氏物語　地名と方法

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

巻名としての地名「須磨・明石」の機能

南波　浩

一、『源氏物語』における構造連関手法

『源氏物語』における手法の一つの特長として、有機的世界観に基づくとも見られる構造連関の精妙な手法が全巻を貫流している。

紫式部にとって、物語は生命体であり、構成諸因子が相互に緊密な関係を保ちつつ、部分と全体とが必然的な連関を目指して成り立っている有機体である。

本来、有機体は、構成源として構造と機能との二大因子を保有し、構造と機能とは、またそれぞれ、それらを成り立たせる諸因子を含有しており、しかも、それらの因子は、個別に存在するのではなく、相互に連関性を保って全体としての目的に作用している。

有機体――生命体を、「体」・「相」・「用」の総体とみるとき、

海水（体）は、静かに（相）、波立っている（用）。

花（体）は、赤く美しく（相）、咲いている（用）。

月（体）は、明るく（相）、輝く（用）。

など、「水を離れて波なく、灯を離れて光なし」（『沙石集』）であって、それぞれの因子が相互に連関性を保っている。

「体」は、存在論からいえば、本体・基体であり、認識論からいえば、本質・原理である。

「相」は、客観的に認知される形姿であり、特性であり、現象である。

「用」は、本体に従属し、本体の性能を発揚させる機能であり作用である。

物語を構成する主因子としての構造は、主として「体」・「相」に相関し、機能は主として「相」・「用」に相関するものと見なされる。

『源氏物語』は、上述のような物語構成の諸因子の相関性を精妙適確に形象化し、どの因子を取り上げても、孤立的・個別的理解を許さない重層性・連関性・多義性を示現しているのが特色である。

『源氏物語』中には、二〇〇個に垂（なんな）んとする地名が見られるが、地名そのものが巻名となっているのは、「須磨・明石」のみであって、この地名が、須磨巻、明石巻という巻の物語内容との連関性はもちろん、構成因子としての地名としてもつ多義性、重層性も特色的である。

『源氏物語』の巻々の命名については、その起源や分類に関する解説や、石川徹氏の有益な考察[1]があり、また、須磨・明石巻の物語的意義については、多くのすぐれた論究が見られるが、地名がそのまま巻名になっている意味についての地名的考察については乏しい。

地名がそのまま巻名になっている点には、作者自身の命名か、作者と読者とのおのずからな合意の命名か、あるいは後人読者の命名かは、なお論議の余地はあるにせよ、それは物語的必然性に基づくものであることは、否定しがたい。

『源氏物語』中、二〇〇種に垂んとする地名のもつ特性については、各方面からの考察が必要であり、この「須磨明石」の地名即巻名についても、各種の観点からの考察が可能であろうが、今はそれについての、ささやかな一考

察を試みたい。

二、予言にみる構造連関機能

周知のように、『源氏物語』（とくに正篇）は、一世源氏、光君の宿世・生涯を語る物語と、一応、概言し得るようであるが、その光君は、この世の者と思われないほどの美貌をもつ、多芸多才、多情多感の人物と語られていて、いかにも昔物語に見られる伝承的・浪漫的主人公を想わせる措定である。

だが、このような昔物語的主人公による話型や命題を踏襲するかのように想わせながら、物語の展開とともに、物語的な現実性・真実性・必然性を感じさせてゆくのが、作者の手法であった。

「光君」という呼称も、（現実の人物にこの名称をもつ人物がいたことも知られているが）いかにも昔物語的イメージを受けるが、実は、この主人公の容貌の「にほはしさは、たとへむ方なく、うつくしげ」であったので、「世の人、光る君と聞こゆ」[2]と語り、さらに、そもそもこの呼称の始源は、主人公の観相をした「高麗人（こまうど）のめで聞えて、付け奉りけるとぞ言ひ伝へたるとなむ」（一巻、一二六頁）と述べて、作者自身の個人的、主観的な命名ではなく、この主人公に接した世人のみならず、外つ国のすぐれた相人までが、実感として呼称したものだ、と語りつがれているものである、という風に記している。

作者は、このような理想型主人公の宿世を語るに当って、自分が勝手に浪漫的に構想したのではなく、この主人公の宿世は、主人公と同時代のすぐれた相人や卜者たちが、卜相の上から証言している事実だったのだとして、物語中に三種の予言を語っている。

その第一は、(1)桐壺巻における高麗（こま）国から渡来した優秀な相人の占いによる予言。

㈠国の親となりて、帝王の上（かみ）なき位にのぼるべき相おはす人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。

おほやけのかためとなりて、天の下を輔弼くる方にて見れば、またその相違ふべし（桐壺、一一六頁）

第二は、(5)若紫巻での、藤壺懐妊の折、源氏が見た夢で、

(二)おどろ〳〵しう、様異なる夢を見たまひて、合はする者を召して問はせたまへば、及びなう思しもかけぬ筋のことを合はせけり。（占者）『その中に違ひ目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる』と言ふ。（若紫、三〇八頁）

第三は、(14)澪標巻のもので、源氏は明石より帰京後、明石の君のことを案じて、使者を明石へ遣わした。その使者が帰京して、無事に姫君がお生まれになったと知らせた時、以前に占わせた宿曜師の予言を思い浮かべた。その予言は、

(三)御子三人、帝、后必ず並びて生まれ給ふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし。（澪標、二巻二七五頁）

という内容であった。

このように、(一)人相占い、(二)夢合わせ、(三)宿曜の星占いという三種類の予言を設定し、源氏の宿世の大要を予示しているのは、これら三種の予言が、個別のものではなく、三者が相乗作用を発揮し、一個の全体となって、源氏の宿世の大要を予言する機能を果たすものであり、三者の結合によって、より客観性・信憑性を増大させる相乗的効果を発現させるためのものであった。

『源氏物語』の予言や夢合わせについては、秋山虔[3]・阿部秋生[4]・大朝雄二[5]・日向一雅[6]などの諸氏の論考があり、たとえば、秋山氏が、

人間を決定的に支配する宿世を信じ、またそれに絶対的に頼みを寄せた当時の人々にとっては、夢判断を信ずると同様に観相の予言は力をもつものであった。『源氏物語』の読者にとってもこの高麗のすぐれた相人の言は大

いに期待を寄せるに足る一つの厳然たる事実としてうけとられたのであった。

と言われているように、占言や夢判断、宿曜の星占い等は、それぞれの重みをもって、王朝人、とくに当時の物語読者たちには、極めて信憑性をもつものと信じられていた。

たとえば、『文徳実録』（嘉祥三年五月五日）にも、宝亀八年（七七七）高麗大使都蒙が来朝した時、その接待を命ぜられた橘清友は、なお弱冠であったが、その風貌を見た大使が、「此人毛骨非レ常。子孫大貴」と予言したとあるが、はたして、その娘嘉智子は嵯峨帝の后となり、仁明帝や、淳和帝の后となった正子などを生んで重んぜられ、世に檀林皇后と称せられている。

また、『三代実録』（光孝帝即位前紀）には、

天皇（光孝）は少くして聡明、好みて経史を読み給ひ、容姿閑雅、謙恭和潤、慈仁寛曠にして、九族を親愛し、性風流多くして尤も人事に長じ給ふ（原漢文）

と、あたかも光源氏像の先例（右は醍醐天皇像の先例などとも言われている）の如き記述があって、その次に、

嘉祥二年（八四九）、渤海国入覲し、大使王文矩、天皇（光孝）の諸親王中に在りて、拝起し給ふ儀を望見し、所親に謂ひて曰はく、『此の公子（光孝）、至貴の相有り。其の天位に登ること必せり』（原漢文）

とあり、二十才の公子を見て、三十五年後の即位を予言し、適中させている記述がある。

先記の『文徳実録』の高麗大使都蒙については、『続日本紀』（光仁帝、宝亀七年十二月廿二日条）に、「渤海国遣」献可大夫司賓少令開国男史都蒙等、一百八十七人、賀二我即位」とあるから、高麗大使は渤海国大使であり、桐壺巻の「高麗の相人」も渤海国の相人であろう。

このように国史にも高麗の相人の予言の適中を伝えており、作者はこれらの史伝や時人の占言への信頼感を見きわめての予言事象の設定を行ったものと察せられるが、より注目すべきは、物語世界のコンテクストによる物語的必然

性に基づく設定であったという点である。

それは、一例として具体的に記せば、前述のように、光君と呼ばれ、才色兼備、至れる風雅の器量人とされた主人公であっただけに、これほどまでに完璧の御子を持った桐壺帝は、満悦とともに、そのような満ち足りた御子の前途に懸念を覚え、不安を感じたのは当然であろう。

月日経て、若宮（宮中へ）参りたまひぬ。いとどこの世のものならず、きよげにおよすけ（成長シ）たまへれば、（帝ハ）いとゆゆしう思したり（桐壺、一一三頁）

世に知らず聡うかしこくおはすれば、（早死デモシハシマイカト）あまり（ヒドク）恐ろしきまで御覧ず（同、一一四頁）

など、皇子のあまりの優秀性、理想性に、「ゆゆしう」――魔物などが魅入り、不慮の災いを与えはしまいかと案じられたとある。

この感情は、当時の読者たちにも共通するもので、理想の人として絶大の好感を寄せる主人公の、余りに満ち足りた有様に、その将来に不安を覚えていたであろう。

それ故にこそ、帝は思案の末、高麗の優秀な相人の来朝を機に、鴻臚館に源氏を赴かせて観相を受けさせたのであった。

すなわち、観相あるいは相人の予言は、単なる史伝に依拠する踏襲的設定ではなく、物語のコンテクストに基づく必然性をもつ、肯ける設定であり、一方、物語読者のもつであろう懸念に対する配慮でもあった。

しかも、その予言は、物語の方向を決定づけるキー・ストーンであり、物語の長篇的構想の地下茎をなすものであって、それを根茎にしてハスを咲かせるか、鱗茎にしてユリを開花させるか、あるいは、塊茎にしてダリアにするか、球茎にしてシクラメンにするかは、物語のコンテクストの進展の中での当為性によって決定されてゆく、という手法

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com